

Title	京都の元開業助産婦のライフストーリーを通して見た 20世紀の日本の助産職の盛衰
Author(s)	千葉, 陽子
Citation	健康科学 : 京都大学医学部保健学科紀要 (2008), 4: 1-6
Issue Date	2008-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/53887
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

原 著

京都の元開業助産婦のライフストーリーを通して見た 20世紀の日本の助産職の盛衰

千 葉 陽 子

Vicissitudes of Japanese Midwives in the 20th Century Through a Life Story
of a Former Independent Midwife Practitioner in Kyoto

Yoko CHIBA

Abstract: [Background] After the Second World War, birthing in Japan shifted from “at home by midwives” to “in hospitals/clinics by obstetricians”. Although independent midwife practitioners had conducted most deliveries at home before the shift, 85.7% of the midwives in practice in 2004 were working for hospitals and clinics. [Purpose] To explore the history of Japanese midwives in the last century, especially the background of the postwar decline of midwife practitioners. [Methods] Non-structured individual interview with a former independent midwife practitioner currently living in Kyoto, Japan. [Findings] During the first postwar baby boom busy practicing midwives were not aware of the nursing reforms that directly affected midwifery practice and education, and they failed to develop their successors. In addition, family planning, which was promoted by midwives after the war, had ironically generated a preference for smaller family size and safer delivery at medical institutions. This resulted in a drop in the number of clients for independent midwives and accelerated the medicalization and institutionalization of childbirth. Even with the declining birth rate, current society still needs midwives, and the postwar experience should alert today’s midwives to be sensitive to relevant issues that influence their future.

Key words: Midwife (midwives), Independent midwife practitioners, The 21st century, Life story interview, The postwar decline (of independent midwife practitioners)

は じ め に

第二次世界大戦後、我が国では出生数や合計特殊出生率、妊産婦・乳児死亡率等が低下し、これに伴い出産助産者や場所が「助産婦による自宅出産」から「医師による病院出産」へと移行した(図1)¹⁻⁴⁾他。かつては開業助産婦がほとんどの出産を介助していたが、出産の医療化・施設化に伴い、平成16(2004)年には就業助産師の85.7%が病院・診療所で勤務するようになった⁵⁾。こうして助産師を取り巻く状況が激変した中、ライフストーリー・インタビュー等の質的研究方法により開業助産婦の活躍の軌跡を把握し、後世に伝える試みがある⁶⁻⁹⁾他。これらの先行研究によると、出産の医療化・施設化以前の助産婦は妊産婦やその家族・地域社会との繋がりが深く、尊敬され、誇り高く

働いていたが、助産婦の衰退期についてはあまり語られていない。そこで今回、京都市内で開業助産婦として活躍し助産所閉所や診療所勤務の後に引退された方へのインタビューを通して、開業助産婦衰退期も含めた活動の軌跡を捉え、20世紀の助産婦の盛衰の背景を再考察し、現代への示唆を得ることを目的に研究を行った。

方 法

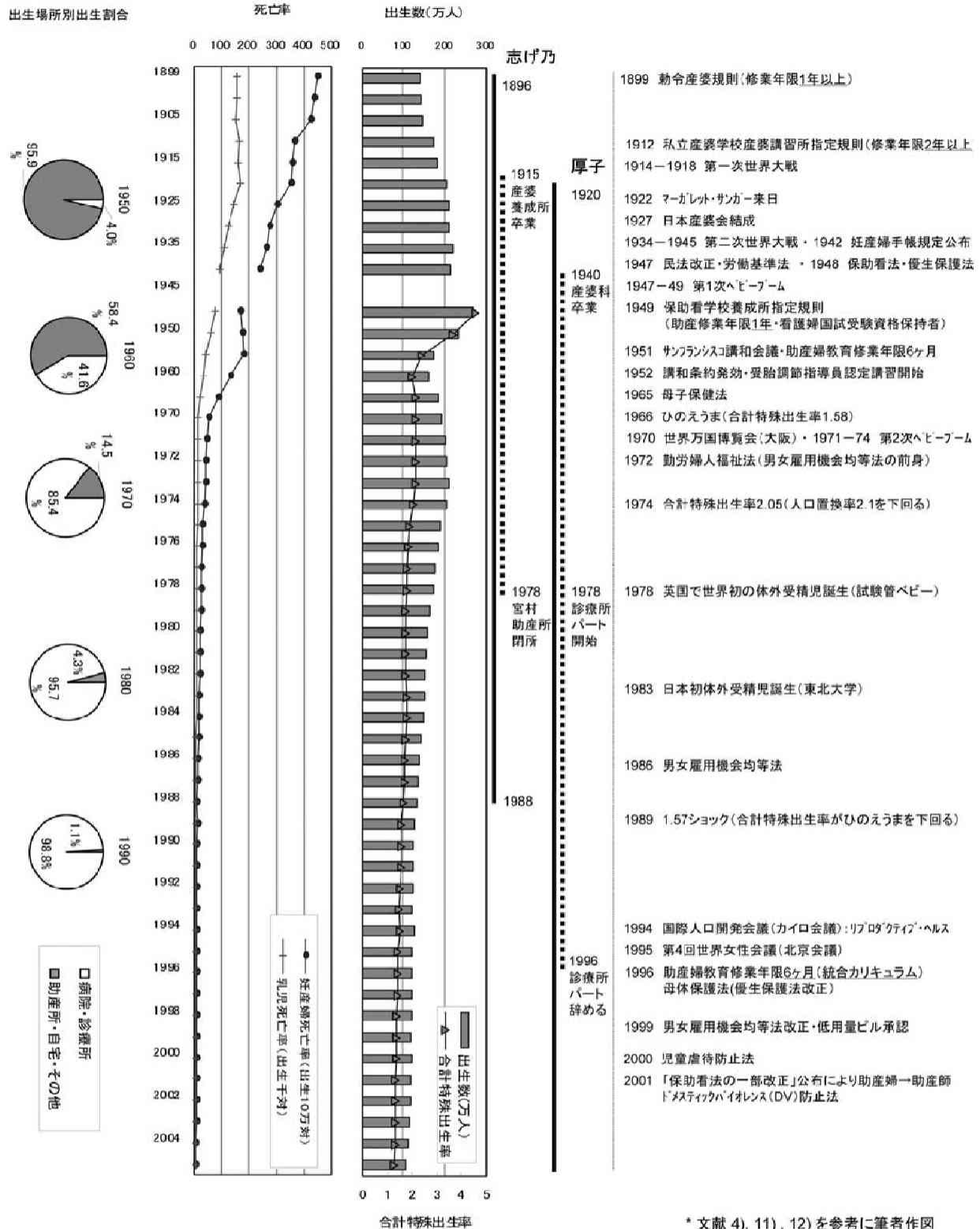
1. 研究対象者

京都市内在住の元開業助産婦、宮村厚子氏、87歳(以下、厚子さんとする)。

2. 研究期間および方法

研究期間は平成18年6月～平成20年1月で、厚子さんへの非構成的個別インタビューを行った。厚子さんの母・志げ乃さん(故人)も助産婦であったため、母親についても問うた。インタビューは厚子さんの都合のよい日にご自宅で行い、内容を録音しメモに留めた後、逐語録としてタイプ打ちし、これを時系列に沿って編集した。本研究のような質的研究法に対しては、

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
Human Health Sciences, Graduate School of Medicine, Kyoto University
受稿日 2007年10月31日
受理日 2008年2月6日



* 文献 4), 11), 12) を参考に筆者作図

図1 宮村母子のライフストーリーと時代背景・母子保健関連指標

量的研究法より信頼性や妥当性が乏しいとの批判もあるが、サンプル数や記述の厚みが異なる両手法の比較は難しい。ライフストーリー研究では、調査過程を透明にし、語りに対する語り手自身の内的一貫性を高めることで、こうした批判に込める¹⁰⁾。今回は、厚子さんの内的一貫性を高めるべく、ご自身の経験や語り

と研究者による記述が一致しているかを確認して頂く作業を4回行った。

尚、平成13年12月公布の「保健婦助産婦看護婦法の一部改正」により助産婦の名称が師へ変更したため¹¹⁾、本報では時代に合わせて婦と師を使い分けた。

3. 倫理的配慮

厚子さんには事前に研究目的、方法、インタビュー内容の本研究への使用限定等を説明し、了承を得てからインタビューを開始した。草稿完成後、記述内容を厚子さんに確認して頂き、同意を得て投稿した。

結 果

1. 宮村助産所

宮村助産所は京都市南区にあり、京都駅の南側で、油小路通九条～十条間に位置していた。京都市営路面電車（市電）「九条車庫前」駅まで徒歩約10分で、かつては田畑が多く、民家が散在し、蝶や蛍が飛び交うのどかな地域であった。現在は、阪神高速8号京都線・油小路線の開通工事に伴って高架道路の建設が進み、大型車両が行き交う地域で、宮村助産所があった頃の面影はない。

2. 母の思い出と助産所開業

厚子さんの母・志げ乃さんは、明治29（1896）年3月に8人きょうだいの末子として三重県の農家で出生した。大正4（1915）年に19歳で大阪の緒方病院産婆養成所を卒業後、地元で結婚し、その後夫と京都市へ引越した。そして24歳（大正9・1920年）で厚子さんを、数年後に厚子さんの弟を出産した。

京都市産婆組合への登録記録では、免状下附が大正4（1915）年、産婆名簿登録が大正10（1921）年、産婆組合加入が大正13（1924）年である。厚子さんは「弟が生まれた頃には母はもう開業していた。」と記憶している。最初の嘱託医は南区内の産婦人科医師で、徒歩約20分で往来できたが、この医師が亡くなった後は伏見区の産婦人科医師と嘱託契約を結び、車で往診してもらった。

志げ乃さんは、自分自身や仕事に対して厳しい母親であった。常に着物に帯を締めて産婦宅に出向き、この上に白の予防衣を着て出産介助をしていた。厚子さんの幼少期には、三重から時々母方祖母が来て家事を手伝っており、厚子さんの父親は勤めに出ていたが、助産所開所から閉所までの間「女のすることには一切口出ししなかった。」という男性であった。

3. 産婆への道

厚子さんは、高等女学校卒業後「お母さんを手伝おうかな。手に職をつけなあかん。」と思い、18歳（昭和13・1938年）で京都市医師会付属産婆看護婦学校産婆科（上京区丸太町知恵光院）へ入学した。1年目は講義中心、2年目は実習中心、実習場所は京都市児童院（上京区千本通竹屋町東入）の産科で、分娩介助は20件程行った。厚子さんは「九条車庫前」から「丸太町知恵光院」まで市電を乗り継ぎ、洋服で通学していたが、羽織袴で勉強する学生もいた。

4. 戦争中

厚子さんは昭和15（1940）年に産婆科を卒業し、助

産所を手伝い始めた。助産所では、妊婦健診、出産介助（入院と自宅）、産褥入院、産褥家庭訪問を行い、志げ乃さんが助産所を、厚子さんが家庭訪問を担当した。出産件数は月20～30程で、ほとんど会陰裂傷を作らなかった。分娩費を払えない人もいたが、無理に請求しなかった。助産所利用者は徒歩約30分圏内に住む者が多かったが、バスでの家庭訪問や、車送迎付で遠方に出産介助に行くこともあった。

戦争中は、昭和20（1945）年1月16日の東山区・馬町空襲の際に「地震ほど家が揺れた。」という体験があったが、京都には空襲もなく食糧不足に困ったくらいで、男性の出征後は妊婦が減り、むしろ緩やかなペースで働いていた。

5. 終戦後

宮村母子は、戦後のベビーブームに伴い超多忙となり、厚子さんによる産婦宅での出産介助も増えた。物資不足のため衛生材料やオムツの調達に困り、新聞紙や浴衣等の所持品で代用した。入院時に産着を持参できない人もおり、厚子さんらが自分の浴衣を解いて産着を縫うこともあった。この多忙の中、厚子さんは、京都大学で行われた10日間の講習を受け、保健婦助産婦看護婦法（保助看法）の規定下で新しい助産婦免許（昭和27・1952年国家助産婦籍登録）の交付を受けた。他にも、多くの講習会に参加した。

また助産婦が家族計画の推進役にもなり、京都府産婆会の会員であった志げ乃さんが保健所から受け取ったコンドームを産後の母親に配布し、熱心に指導した。厚子さんは、母親の高齢化に伴い46歳（昭和41・1966年）で京都府助産婦会に入会した。

6. 母の国内旅行・母子での海外旅行

志げ乃さんは、万博（昭和45・1970年）より前頃から、厚子さんに仕事を任せて助産婦仲間とよく温泉旅行をするようになった。多い時には年に3～4回、1週間から10日間位出掛けることもあった。

また宮村母子は、万博の頃にハワイへ1週間、アメリカ西海岸とメキシコへ10日間の旅行をした。海外旅行に出かけると言う、皆に「嘘と違うか？」と言われて、当時1ドル約300円であった。厚子さんは、「日本では入りとうても行かれへんし！」と、ロサンゼルスで初めてディスコに行った。「若い頃は母子で旅行した事なんて1回もなかったし、ご褒美に行った。」と言うことであった。

7. 助産所閉所

病院出産の増加について厚子さんは、「万博前からみな段々病院行かはるようになった。病院の方が安全や言うことになったんでしょうね。ほんで、ようけ（たくさん）産婦人科も増えましたさかいね。」と振り返る。万博の年は厚子さん50歳、志げ乃さん74歳で、厚子さんには後継者がいなかったため、1人で助産所

の経営を維持拡大していくつもりはなかった。年々出産件数が減少し収入も減ったが、蓄えがあり収入減は気にならなかった。そして母の体調不良のため、昭和53（1978）年頃に宮村助産所を閉めた。厚子さん58歳、志げ乃さん82歳の頃であった。閉所時は、「戦後は忙しすぎて疲れてた。それまでは、朝も晩も盆も正月もなしで働いてたし、気楽になってホッとした。」と感じた。

8. 病院でのパート

厚さんは、助産所閉所の頃から京都市内の産婦人科診療所でパート助産婦として働き始めた。医師から「お産の経験のある人を世話して。」と聞いていた友達から声がかかったのがきっかけで、厚さんはここで約18年間（平成8・1996年、76歳頃まで）勤めた。診療所では、医療機器の使い方を覚えるのが大変であった。「家で働くのと病院で働くのとは違うし最初は戸惑ったけど、お産自体はどこでも一緒やし大丈夫やった。」ということであったが、休みが日曜日と重なった時は京都市医師会での講習に参加させてもらい、勉強にも努めた。

9. 母の他界

昭和63（1988）年10月、志げ乃さんが92歳で永眠。この時厚さんは、助産所の器具や記録を全て処分した。「ちゃんとしとかな残された者が困る、って聞いてた。誰も後にする者（後継者）もおらんし、誰にも世話にならんでいように全部処分してん。」ということで、インタビュー時宮村助産所に関する物で拝見できたのは、志げ乃さんの産婆養成所卒業証書と、厚さんに戦後交付された助産婦免許だけであった。開業助産婦の娘には、「親のこと見てたら助産婦だけはしとくない（したくない）。」と思う者が多く、厚さんの仲間でも後継者がいないため助産所関連物品を全て処分した人がほとんどであった。

10. 現在の厚子さん

厚さんは現在、京都市南区の宮村助産所跡の自宅で独り暮らしをされており、膝の調子が少し悪いがお元気で、身の回りの事は全て自分でされている。「もう組合辞めてから10年近うなる。南区の知った人は皆亡くなった。」と、助産婦仲間の他界を寂しがっておられたが、インタビューの最後に「人に『世話になった。』言うて喜んでもらうた。」と助産婦としての人生を笑顔で振り返られた。

考 察

1. 宮村助産所開所から繁忙期

明治32（1899）年の産婆規則の公布以降全国的に産婆の法制化が進む中、志げ乃さんは専門教育を受けて職業をもつ機会に恵まれた先進的な女性であった。厚さんの記憶より、明治生まれの産婆の凛とした姿が

うかがえた。産婆養成所卒業・免状下附、結婚、第一子出産、産婆名簿登録、産婆組合加入、第二子出産という時系列であるが、「弟が生まれた頃には開業していた。」という厚さんの記憶からも、産婆組合への加入（大正13・1924年、28歳）後から本格的に独立開業されたと思われる。産婆名簿登録後独立開業までの3年間は、第一子の子育てをしながら熟練産婆の下で修行されたのか。30歳前での開業は時期尚早の気もするが、出産数が多くてニーズが高く、それまでに独立できる程の経験を積まれていたと考えられる。また子ども2人を抱えての開業で、夫や親をはじめ、隣人や地域の産婆仲間の理解と協力も不可欠であったと思われる。

厚さんは産婆である母を見て育ち、母の大変さを理解しつつも、それ以上に格好よさ、やりがい、手に職をつけることの重要性を感じ取って産婆の道を選んだと考えられる。また洋服を着て市電で通学する姿からは、厚さんが誇り高き産婆になるという希望に満ちたモダンな助産学生であったと想像できる。50歳頃のアメリカのディスコでの経験からも、厚さんが仕事以外の事にも好奇心旺盛なモダンな女性で、明治生まれの志げ乃さんとは違う雰囲気をお持ちであることが分かる。

宮村助産所開所から戦後のベビーブームに伴う繁忙期までの地域母子保健活動は、先行研究の内容と大差はない。しかし母子2代に渡って産婆となり、常に2人で助け合えたことが、宮村助産所の繁盛に繋がったと思われる。また空襲の被害を受けずに助産所が戦争中も日常的活動を展開していたこと、市電による通学、産婆組合通い、講習会参加等を通して、京都ならではの産婆の活動の様子をうかがい知ることができた。

2. 宮村助産所衰退期から閉所

1) 終戦直後の助産制度改革期

産婆は戦前・戦中の富国強兵政策や戦後の第一次ベビーブームのもとで出産を支援したが、戦後は家族計画を普及して望まない妊娠を予防した。宮村助産所でも志げ乃さんを中心に家族計画指導が行われたが、実はこの活動が、大林¹²⁾の指摘のように、少産志向や出産における安全の最優先志向を広めて施設分娩の頻度を高め、結果的には開業助産婦衰退に繋がる一要因となった。

また連合国軍総司令部の指導下で看護教育や資格制度の改革が行われ、助産婦は看護教育を基とした資格となった。大林はこの頃の助産婦について「改革に関する漠然とした不安はあったが、日々の生活、出産介助に必要な物資の調達、2日も3日も眠らないといった多忙な業務、そして働けど働けど、右から左に吸い取られていく酷税にあえいでいるといったのが、一般

の開業助産婦の実態だったようである¹³⁾。」と記述している。宮村母子もこれと同様、物資不足の中母子に寄り添って多忙を極めていた。厚子さんは、産婆組合員の母から改革の情報を聞いた記憶もなく、助産婦に起きていた変化は把握していなかった。身近な問題として、日々の生活や仕事、保助看法のもと新しい助産婦免許の交付を受けて助産業務を継続していくことが最大の関心事であったと推測された。

2) 第二次ベビーブームまで

昭和35（1960）年には全国的に出生の41.6%が病院・診療所、58.4%が助産所・自宅・その他で行われていたが、昭和45（1970）年には85.4%が病院・診療所、14.5%が助産所・自宅・その他となり⁴⁾、1960年代に病院・診療所での出産が台頭した。万博前頃から志げ乃さんが助産婦仲間と温泉旅行を始めたことから、妊産婦が次第に医師の方へ行き、宮村助産所での仕事量が減少してきていたことが分かる。また宮村母子が海外旅行をした昭和45（1970）年頃は、長期間助産所を閉めても大丈夫な程利用者が減っていたと言える。

この頃高齢の助産婦たちは、仕事一筋だった自分の人生を振り返り、志げ乃さんのように温泉旅行に出かけたり、家でゆっくりしたりする等、仕事のペースダウンを自分の休養時期と捉えた人も多かったであろう。またそれまでの活躍による十分な金銭的蓄えが、こうしたゆとりある生活を可能にした。

一方、厚子さんのようにまだ引退年齢でなかった助産婦は、助産所継続に精を出して後継者を育てるより、病院勤務に流れていった。厚子さんはたまたま診療所勤務を始めたが、扶養すべき家族が多くいた人なら安定的収入を求めて早くに給与所得者になることを望んだであろう。また当時医師が「お産の経験のある人を世話して。」と言っていたことから、病院や診療所でも出産を取り扱い始めた頃には熟練助産婦を必要としており、病院・診療所と助産婦の思惑が見事に一致した。こうして、昭和46（1971）年頃から始まった第二次ベビーブームでは、助産婦が病院や診療所へと場所を変えて活躍した。

3) 第二次ベビーブーム以降

昭和55（1980）年には出生の95.7%が病院・診療所、4.3%が助産所・自宅・その他で行われるようになり⁴⁾、宮村助産所閉所の昭和53（1978）年頃にはほとんどの出産が病院・診療所で行われていた。全国平均と比べると宮村助産所の閉所時期は遅いが、周りの助産所を見て慎重に決心されたのか、利用者がいなくなってもいざ閉所となると複雑な思いでおられたのかもしれない。

助産所閉所後、厚子さんは診療所で働き始めたが、58歳頃からの再出発で戸惑いがあったものの、出産の

エキスパートとしてその基本的知識と技術を活かして妊産婦を支援し続けた。そして、地域での開業経験がなくても病院や診療所で出産介助ができる助産婦が増えた頃に退職された。このように元開業助産婦は、出産の医療化・施設化を陰で支えていたことが分かる。

志げ乃さんの死後、厚子さんは助産所関連物品を全て処分されたが、自身の偉業を認識して後輩助産婦に知識や技を残すということは一切なく、「立つ鳥あとを濁さず」という潔さで助産所との縁を断ち切られた感じである。「親のこと見てたら助産婦だけはしとない。」という若い女性の言葉からも分かるように、厚子さんがかつて志げ乃さんの姿を見て産婆になろうと思った頃とは、社会における助産婦の認識や女性を取り囲む状況が大きく変わってしまった。

4) 現代への示唆

20世紀には我が国の社会が劇変し少子化も進んだが、今も子産み子育ては続いており、助産師は必要とされている。現代の助産師が厚子さんと同じ環境で助産業務を行える訳ではないが、厚子さんや類似研究による先輩助産婦の語り⁶⁻⁹⁾他は、時代を越えて後輩助産師にいくつかの示唆を与えている。

それは、助産業務の中核としての出産ケアを充実させることの必要性、妊産婦を取り囲む家族や地域社会へも目を向けてケアを提供することの重要性、産科医師をはじめとする医療従事者と良好な関係の中で協力し合うことの重要性、ケアの提供に当たり物品やシステム等の工夫をすることの必要性、と言うようなごく当たり前のことであると思われる。

また開業助産婦の衰退に注目した場合、助産婦は社会の変化や政策に翻弄されつつ変遷したが、実際に政策決定に与える影響が少なかったと思われる¹²⁾。厚子さんが活躍された時代と違いインターネット等の通信手段が発達し、全国的な動向や情報の入手が容易になった現代、各助産師は自分たちを取り巻く事象に注目し、自らの手で助産師の将来を方向付けて行けるよう努める必要があると考えられた。そして、助産診断・技術のエビデンスを追究し、後進をしっかりと育成することも重要な課題であると再認識された。

ま と め

少子化に歯止めがかからない昨今では、産科医師不足に伴う産科閉鎖と周産期病院の集約化等の影響で「お産難民」の問題が浮上しており、医師以外の合法的出産介助者で周産期ケアを専門とする助産師が再注目されている。これと同時に臨床・教育現場でも様々な変革が起こっており、京都大学においても平成19（2007）年3月に医療技術短期大学部助産学専攻科での助産師養成に終止符を打ち、看護学士4年間の選択

課程での助産教育を開始し、まさに変革の途中にある。このような中、助産師には、今回得られたような示唆を踏まえて、各自が置かれている立場で社会のニーズに応えるべく研鑽することが期待されている。

また、出産の医療化・施設化以前に活躍された助産婦の諸先輩はかなり高齢となられ、貴重な体験をうかがう機会は今後ますます減少していくと思われるため、こうした先輩方に問うて学ぶ機会を大切にしなければならない。

謝 辞

本研究にご協力下さいました宮村厚子さんに深謝申し上げますと共に、今年米寿をお迎えになられますことを心よりお祝い申し上げます。また、貴重な資料を閲覧させて下さいました京都府助産師会にも、厚く御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 藤田真一：お産革命。東京：朝日新聞社，1988
- 2) 松橋恵子：赤ちゃんを産むということ・社会学からのこころみ。東京：日本放送出版協会，1994
- 3) 松岡悦子：出産の文化人類学・儀礼と産婆。東京：海鳴社，1997
- 4) 財団法人母子衛生研究会編：母子保健の主なる統計。東京：母子保健事業団，2007（平成18年度刊行）
- 5) 厚生統計協会編：国民衛生の動向・厚生指標。臨時増刊。東京：厚生統計協会，2007；53(9)：182
- 6) 灘 久代：昭和の時代を助産師として生きた吉田キヌエ姉の語り。日本助産学会誌，2005；19：39-48
- 7) 西川麦子：家庭分娩の時代の助産職・クライアントへのトータルケア。助産師，2007；61(1)：10-13
- 8) 仲村美津枝：沖縄県の助産師の歴史・戦前戦後の歴史の変遷から見えてきたもの。助産師，2007；61(1)：14-19
- 9) 灘 久代：姑から学んだ助産師業、そして自分が生きた道・三浦和子姉の語り。日本助産学会誌；21(1)：40-51
- 10) 桜井 厚，小林多寿子：ライフストーリー・インタビュー・質的研究入門。東京：せりか書房，2005
- 11) 青木康子他編：第3版助産学体系・第1巻助産学概論。東京：日本看護協会出版会，2006
- 12) 大林道子：助産婦の戦後。東京：勁草書房，1994
- 13) 前掲書12)：68